非定型的な骨嚢腫を思わせた1例について

熊本大学医学部整形外科学教室

水野秀夫・森修
北川敏夫

A Case of Atypical Bone Cyst

by

H. Mizuno, O. Mori, T. Kitagawa

Department of Orthopaedic Surgery, Kumamoto
University Medical School, Kumamoto

We have experienced unusual case of bone cyst after the pathological fracture.
Bone cysts are usually found during the first two decades of life. The cavity is filled with cystic fluid and the wall is lined by a thin layer of connective tissue.
But our case was twenty-eight years old. In the cavity of the bone, we couldn't obtain not only the cystic fluid but also the fibrous connective wall of the cyst.

はじめに

今回われわれは骨嚢腫を思わしめたが骨折のため病像が複雑となり確定診断が困難であった1例を経験したので供覧する。

症 例

28歳、女性

主 訴：右上腕骨病的骨折

家族歴及び既往歴：特記すべきことなし

現病歴：昭和54年9月頃より時々右上腕部が誘因なくチクチク痛むのに気づいていたが、放置していたところ、翌年1月突然右上肢に激痛が起こり2日間持続した。某医受診し、神経痛と言われ湿布、内服、筋注を続けていたが、その後テーブルを拭いたり物を持ったりしたときに右上腕部に疼痛を自覚していた。2ヵ月後、仕事中に足をすべらして後ろに転倒し、直後より疼痛のため右上肢が動かせなくなった。某医受診し、X線上的病的骨折を指摘され当科を紹介され入院となる。

入院時所見：体格、栄養状態中等度、皮膚粘膜に異常色素なく、右上腕部を除く四肢の変形、運動制限はない。甲状腺や触知できるリンパ節の腫脹なく、胸腹

部臓器に異常所見を認めない。

臨床検査所見：赤血球数383万、白血球数5,400、血色素11.7g/dl、Ht32.4%、血清蛋白6.2g/dl、総コレステロール169mg/dl、血清Ca9.3mEq/l、無機P3.3mg/dl、CRP(-)、血沈1時間20mm、2時間45mm、Al-Pase46U/l、Acid-Pase12K・Au、尿蛋白(-)、尿糖(-)、その他肝機能、腎機能にも異常は認めない。

X線所見：右上腕骨の遠位骨幹端部より骨幹部にかけて橈円形の境界明瞭な骨吸収透明巣がみられ、中心の部位で骨折を起こしている。骨皮質の菲薄化はあるが膨隆はない。

骨膜反応あるいは骨硬化像も認めない(図1)。

手術所見：骨折部には骨欠損部の中に第三骨片とともに暗赤色の柔らかい腫瘍塊が見えたので組織標本とした。骨欠損部は縦約3cmの空洞状を呈し、中に漿液の貯留を認めず、壁の表面は平滑であった。骨皮質は菲薄化しているが、硬度はほぼ正常であった。骨内壁には、骨嚢腫において通常見られる膜様物は存在しなかった。

病理組織学的所見：採取した腫瘍塊の組織像では、大半は多量の出血巣を混在する疎な結合織からなり、その中に多数の拡張した血管とともに不規則な形態を

図1

して増殖する新生骨梁の形成がみられ、一部線維性骨異形成ともみられる像を呈している。しかし、骨梁は骨芽細胞によって取り囲まれており、定型的な線維性骨異形成の組織像とは異なる(図2, 3)。

経過：病巣部を十分に搔爬し、腸骨から採取した骨片を自家移植し、プレートによる内固定を行った。術後22週目のレ線所見では移植骨はほぼ均等化を呈しており良好な着床を得ている。

考 察

典型的な骨嚢腫における初診時年齢は大部分が20歳以下であり、病巣部は空洞状を呈し、中に漿液の貯留がみられる。また空洞壁には被膜が存在し、その組織像は疎な線維性結合組織が主体となり、その中に化生による骨梁の形成、血管、骨芽細胞、小型巨細胞などがみられる。

本症例は28歳と年齢的にやや高く、空洞内に漿液の貯留を認めず、空洞壁には被膜が存在しなかった。代りに充実性の暗赤色の腫瘍塊が存在したなど、定型的な骨嚢腫の像とは異なった所見を呈していた。これは骨折による二次変化のために骨嚢腫としての所見が修飾されたためであろうと考えられる。

以上のように、骨折のために病像が複雑となり、定

図2

図2

型的な骨嚢腫と異なり、確定診断が困難であった1例を経験したので報告した。

結 語

今回骨嚢腫を思わしめたが、骨折のため病像が複雑となり、定型的な骨嚢腫の像とは異なった所見を呈した症例について述べた。これは骨折による二次変化のためであると考える。

文 献

- 1) 檜沢一夫：臨整外。11：422-425, 1976.
- 2) 池田亀夫：整外。13：765-772, 1962.
- 3) 加藤 正：整外。19：630-641, 1968.
- 4) 北川敏夫：西日本整災誌。28：174-177, 1979.
- 5) 前田富士雄：日整会誌。37：529-547, 1963.
- 6) 松森 茂：外科。22：843-857, 1960.
- 7) O. Scaglietti, J.: Bone Joint Surg. 61-B: 200-204, 1979.